

# 日本人の装いと梅

寺田 朋代

(山崎美紗子ゼミ)

## はじめに

日本は季節がはっきりと春夏秋冬に分かれており、今も昔も季節の變化を敏感に感じ取り、その中に多様に移り変わる美しさをも、また感じ取ってきた。常に自然と共にある生活環境こそが、日本人特有の美意識の観点を作り上げていったといえよう。そんな四季を愛する日本人が、四季を文様として着物に織り込み身に纏い、常に四季を感じていたいと考えようになったのは自然だったのではないだろうか。

本稿では先行研究として『文様の四季』(1)『きもの』と文様―日本の形と色―(2)等の文様についての本を基盤に、和歌を例に取り上げ日本人の美意識とはどのようなものであったかを考察してみたい。各時代によって変りつつある人々の生活環境を吸収し、その時代に合ったものに変化を遂げていくのが「着物」である。今回の研究では、「着物」と「季節」の関係性とは、またそれに対する「日本人の美意識」とはなにかを、文様として表現される「梅」を取り上げ、追求していきたいと思う。

## 第1章 春の花、梅

### 1-1 梅

早春の花である梅は「百花のさきがけ」と呼ばれている。厳しい寒さの中で丸く小さな蕾を少しづつ膨らませ、上へ上へと伸びていく枝と共に開花していく姿は、春の訪れを思わせる花として今も昔も多くの人を

魅了し感動を与えてきた。早春、葉に先立って香りの良い五弁花が咲き、色は白、紅、淡紅などがあり八重咲きのものもある。

また、多くの故事や伝承を生み出しつつ、長く人々に愛されている梅には別名も多く、「牟女」「うめ」「樗」「梅花魁」「好文木」「香散見草」「風待草」「匂草」「香は之草」と様々な名が存在する。

丸く可愛らしい形や凛と咲き誇る気高さは、文様としても定評があり、着物の柄としてはもちろんのこと絵巻や浮世絵ほかの絵画、品物や屋内装飾にと多彩に表現されている。

平安時代の女房装束に見られる重ねの色目でも、梅の花を表わしたものはとても多く「梅」「梅重」「一重梅」「紅梅重」「紅梅匂」等、挙げだしたらきりが無い。当時の梅は中国文人達に大変愛されていた花であり、中国文化を理想としていた平安時代の日本にとって梅の存在は重要であった。

### 1-2 春の訪れ、春の季節感

「梅暦―うめこよみ・ばいれき」とは、梅の花の開花するのを見て春を知ることを表す。

江戸時代、為永春水著として知られる『春色梅見誉美』は、江戸亀戸村清香庵の梅園を舞台に百花園や杉田の梅見船など多くの梅に関わる物語が描かれている。この四編の序に「梅づくし」という作品があり、これは恋愛小説にあたるが、人事と自然の調和が巧みに描かれている。

四編の序の題名である梅見誉美は「梅暦」に当り、梅の開花によって春の訪れを知り、春から冬へと四季が巡って再び春を迎えるという流れをいう。本文でも「世にひらかせし梅こよみ(現代語訳―世に梅見誉美

は流行するののか」<sup>(3)</sup>と、梅暦を表す文が見受けられる。

また井原西鶴の『武家義理物語』巻四―二「せめては振袖着て成とも」にも、「軒端の梅を暦に、さては春にも成りけるかとおどろき」<sup>(4)</sup>という表現があり、当時の人々の多くが梅の開花で新春を実感するもので、当時の春は陰暦なので新春のことであった。

### 1―3 和歌にみられる梅

もともと梅は、天平時代頃に中国から遣唐使が薬用として持ち帰ったのを初めとし、その後日本各地で栽培したとされている。「素梅」と言われ白梅であったことから、清楚で気品のある白梅は貴族に好まれた。

日本で最初に花として、鑑賞され多くの和歌に歌われてきた梅は、日本における鑑賞植物として最も古い記録が認められている。奈良時代には特に人気を集め、その過程は日本最古の和歌集「万葉集」の中に見受けられ一〇首余りに及び、植物としては萩について二番目に多く詠まれ、桜をしのいでいる。

天平二年（730）の正月一三日に筑紫の国の大伴郷の屋敷で書かれた梅の宴で詠まれた歌では、梅の花の鑑賞を樂しむために集った貴族たちの心の豊かさとおおらかさが詠まれており、この当時の人々がいかに梅を愛し魅力的に感じていたかが見て取れる。

万葉集は「白梅」しか歌われていないが、平安時代以降の『枕草子』では「35 木の花は／木の花は、濃きも薄きも紅梅<sup>(5)</sup>」や『源氏物語』にも紅梅に言及する例が登場している。また『和漢朗詠集』では白梅・紅梅の双方の項目が設けられている。

梅の和歌では、『①鶯と組み合わせるもの／②雪と組み合わせるもの／③雪や月に見立てるもの／④香を寛美するもの』などの形がある。

例えば『古今和歌集』巻第一 春歌上

44 春の夜、梅の花を、よめる

春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるる<sup>(6)</sup>

（現代語訳―春の夜の闇はわけのわからないものだ。梅の花は確かに姿は見えないけれど、その香りだけは隠れるものかね。）この和歌は④に該当し、「夜の梅の香」を歌うもので、「春の夜の闇が隠して何も見えない

い」ということを表している。「あやなし」という言葉が持つ艶っぽさが加えられ、本来は「春の夜の闇」に掛かっているが、それと同時に実際見えないはずの梅の花の「色」や、闇でさえも隠し切れないその「香」にまで波及している。梅の花自体は「月の光」や「春の夜」に隠れ見えない状態にあるが、香しい匂いでそこに存在することが想像できる。

それ以外にも、『古今和歌集』第一巻 春歌上

33 色よりも香こそあはれと思ほれ誰が袖ふれし宿の梅ぞも

（現代語訳―色よりも香がすばらしいと思われる。誰の袖が触れてその袖からの移り香が薫るこの家の梅なのか。）のように、色よりも香りを尊ぶという発想が見られる。

### 1―4 梅から桜へ

その後、平安時代になると梅木の普及と共に次第に時代は「鮮やかさ」を求めるようになり、今まで香りで愛された白梅とは別に艶麗な色彩の紅梅が珍重されていく。それと同時に、枝の付け根近くにぼつりぼつりと花が咲く梅に比べ、桜は枝全体に花が付くため、梅よりも華やかに見えることもあり、「鮮やかさ」を求める平安時代の人々の中で桜の人氣が上昇し、仁明天皇の承和時代（834―847）に人々の意識が梅↓桜へと変化していく。

そのあらわれは、内裏の紫宸殿の前庭に「右近の橘」と共にあった「左近の梅」が「桜」へと代ったことなどが挙げられる。

『古事談』第六三八九 南殿ノ櫻橘ノ樹ノ事（巻六ノ一）

南殿桜樹者、本是梅樹也。桓武天皇遷都之時、所被植也。而及承和年中、枯失。

仍仁明天皇被改植也。其後天徳四年内裏焼亡二焼失了。件木本吉野

山桜木云々

仍造内裏之時、所移植重明親王家桜木也。

南殿の桜の木は、もとはこれ梅の木なり。桓武天皇、遷都の時、植ゑらるるところなり。

しかるに承和年中に及びて枯失す。よって仁明天皇、改めて植ゑらるるなり。

その後、天徳四年（九月二三日）内裏焼亡に焼失し了んぬ。

仲の木のもと吉野山の桜木云々

よって内裏を造る時、重明親王（式部卿）家の桜木を移し植ゑらるるところなり。<sup>⑦</sup>

つまり、桓武天皇遷都時には梅であったが、承和年間（834～847）には枯失した。後に仁明天皇が植替えたが天徳四年に内裏が焼失したので、重明親王の家にあった桜を移植したという。

『続日本後紀』 卷第十五仁明天皇（承和一二（845）年正月―二月）二月一日条

天皇御紫宸殿。賜侍臣酒。於是。攀殿前之梅花。挿皇太子及侍臣等頭。以為宴樂。<sup>⑧</sup>

続日本後紀には、紫宸殿で酒盛りした時、庭前の梅の花を頭に挿したことが書かれている。よって、桜に代ったのは承和一二（845）年以降ということになる。

「左近の桜」は宮廷のシンボルとして、平安時代の初め頃から現在まで何百年にもわたり保護され、大事にされてきた。また現在、桃の節句とも呼ばれる雛祭りでは「左近の桜・右近の橘」が定番となっている。このような経緯もあり、完全に春の主役の座は梅から桜へと変わってしまった。

更に万葉集にはわずかしか詠まれていなかった桜が、平安時代につくられた『古今和歌集』では梅が二〇首程であるのに対し桜は二倍以上を占めることとなっていることもその背景だといえよう。また平安時代は国風文化が盛んとなる時代であったので、より日本らしい「桜」を題材に詠まれるようになったと考えられる。

日本人にとっての「花」とは桜が代表的な存在となっているが、奈良時代から平安時代の前半頃まで、梅がその役割を担っていたといえよう。

## 第2章 色彩と梅

### 2-1 梅の色と『伝統色』

日本の伝統色の魅力は、色を示す色名表現の多彩さであり、色の織りなす世界観はなんとも美しく感じられる。

『枕草子』に

23 すさまじきもの

すさまじきもの、昼ほゆる犬。春の網代。三、四月の紅梅の衣。（現代語訳―不調和で興ざめなもの、昼間ほえる犬。春まで残っている網代（季節外れの漁具）。三、四月に着る紅梅の着物。）とあり、清少納言は、すさまじきもの、すなわちすべて不調和感から生じる興ざめで不快な感じで季節はずれだとして「三、四月の紅梅の衣」をあげている。三月、四月と言えば、今の四月、五月にあたり紅梅の季節はすでに過ぎ去りしまつていく。このように、季節に遅れた色目を着ることは、実に興ざめなことであった。季節と色の組み合わせは非常に重要なことだった。梅には、紅梅と白梅がある。香りの良さで愛でられ和歌等に詠まれ親しまれてきたのは白梅。一方の紅梅は艶麗な色彩が好まれ、平安時代の服飾には、様々な形で紅梅の色が用いられた。

### 【紅梅色―赤みのうすい赤紫】

紅梅の花の色に似た色合いで、かすかに紫味を含む淡い紅色をいう。この紅梅色という色名も、王朝の詩歌や物語に多く見られる。紅梅色は、日本人が愛好する色の一つであり続け、明治時代くらいまでは、身分や年齢の上下を問わず男女ともに好まれた色であった。

紅梅の染色は中古では冬から春（一月から二月まで）の色として愛好され、紅梅色は紅染の濃さによって、濃紅梅（今様色とも呼ばれている）、中紅梅（文献での「紅梅」はこの色を示す）、淡紅梅（薄紅梅の花の色）の三級に大別される。

## 【今様色―流行の紅花染による紫みの赤の色名】

「今様」とはすなわち流行のことである。今様色は平安時代頃から使われたとされ、この時代の人々にとって紅花染の赤色の系統が好まれ流行色となっていたことが分かる。

合わせ色目にも「今様色」の合わせがあり、表〓紅梅、裏〓濃い紅梅である。平安末期の武者が好んだとされており、福田邦夫氏の『すぐわかる日本の伝統色』には、武者の好んだ「紅」もおそらくこの今様色であったのに違いないと記している。染色の色としては紅梅色の濃い色だった<sup>(9)</sup>とされている。

『源氏物語』にも「すぎすぎ見ゆる鈍色ども、黄がちなる今様色など着給ひて<sup>(10)</sup>」と出てくる。しかしこの「今様色」は黄色がちの流行色（黄褐色）と称されているため、紅梅色であったかは定かではない。

他にも、「黒紅（黒紅梅）―紅色に檳榔子の黒を上掛けした、赤味の黒紫」、「梅紫―ややにぶい調子の赤紫、梅は紅梅の赤紫味の形容詞」、「梅鼠―紅梅のような赤紫みをもつ鼠色」などがある。一般的に色名の「梅」とは、赤みの形容として使うことが多かったようだ。

## 2-2 梅の色と「かさね色」

平安時代になるとそれまでの中国文化の強い影響をはなれ、日本独自の色彩文化が構成されていく。その当時の貴族たちのお洒落のポイントは「かさねの美」であった。男女ともにかさねの配色に配慮をしていたが、ただ美しさを追求するだけの配色というだけではなかった。四季折々の植物の名前を色名とし、その配色を着ることによりその植物の風情やその季節感を装い纏ったのである。和歌を詠むことを第一の教養とし、自然の移り変わりに敏感な貴族にとつて、季節を司る植物は生活の一部であり、この自然と共に生きる生活環境から「かさね色目」が生み出された。かさねの配色は、一枚の衣の表と裏の配色が基本となる。当時の着物は真夏以外の全てが裕（あわせ）で裏地がついており、袖口・襟元・裾等で裏が表におめり（ふき）のように表に少し見える部分のことが出る仕立てになっていた。今の着物も袖口や裾から裏生地が見えるように

なっており、これを「ふき」という（ふきとは、おめりの名残。おめりとは元来高価な表記事の擦り切れや汚れを防ぐことが目的であり、比較的安い生地の裏を出すという実用的なことから始まったものと考えられているが、この広い面積を占める表から見える裏の生地の配色を楽しんでいた）。それと同時に平安貴族の女性たちは、現在の着物の原型となる衣装である「十二単」を着始める。三枚、五枚と重ねた襟元は特徴的で、裾等を少しずらずらし重なりをつくり、季節を思わせる色彩に名前を付けた。

今永清二郎氏は『日本の文様 梅―（染織の梅）』で、平安時代の貴族にとつて服飾美顕示における興味の対象は、文様の面白さよりも色彩の諧調であった<sup>(11)</sup>と記している。

「十二単」は「重ね色目」の魅力が最大限に発揮される装束であった。その配色形式には二法あり、①衣の裏と表の色目―（柳の色目の場合）表〓白／裏〓青、②衣数枚の重なりの色目―（松重の場合）上から蘇芳の濃淡二枚、青を次第に濃くした三枚に紅の単の構成となる。これらの配色に付けられた名称は、ほとんどが植物で、春（梅・桜・柳）、夏（藤・杜若・牡丹）、秋（萩・帰郷・黄菊）、冬（椿・枯野）などの季節にちなんだものが主流である。色目に季節にちなんだ名前を付けることで着装の時期が定まることになり、抽象的な色彩により季節の移ろいを感じ表現し、醸成した色の重なりに感情を移入し、独特の美意識の理念が生まれた。

梅に関する色目として、衣の表と裏の色目であると（梅↓表〓白／裏〓蘇芳）（紅梅↓表〓紅／裏〓紫）や、衣数枚の重なり色目であると（梅重↓上から白「表着」・白・薄紅・濃紅・濃紅・極濃紅「五枚」・緑「単」）（雪の下紅梅↓上から白「表着」・白・薄紅・極紅・薄紅「五枚」・緑「単」）があり、裏と表の配色は同色や濃淡なグラデーションである。また、「紅梅」「紅梅匂」「苔紅梅」「裏陪紅梅」と紅梅の諸相を色で再現したものや、「梅重」「裏紅梅」等の重ねの色目の配色は紅梅の花の色を模しているものがある。さらに「雪の下紅梅」のような紅梅に雪が積もった情景を模した配色もある。これらの意図にちなんだ重ね色目は、その着装時期が

いずれも一月から二月までとされている。

### 第3章 梅と「着物」

#### 3-1 文様の形

「梅」を圖案化した文様は「梅の花弁の文様」「梅花文」「梅花が枝についている文様」「枝梅」「梅の木全体を文様としてみる」「梅樹文」に分かれる。梅紋を大別すると、写実的に梅の花を表現した「梅花紋」と幾何学的に圖案化した「梅鉢紋」とに分かれる。

文様として梅は、絵巻や浮世絵ほかの絵図に、器物や屋内装飾にと多彩に表現されており、江戸初期の貴族的・唯美主義的作家である尾形光琳の『紅白梅図屏風』はとても有名である。のちの梅のデザインに影響を与えている。

着物の文様としても、下図のように「光琳梅」「梅鉢」「ねじ梅」「槍梅」「枝梅」「梅寄せ（花やつほみを写実的、または意匠化して寄せたもの。半衿などに多く使用される）」や、他の草花等の自然風物と組み合わせ意匠化したものなど、種類は幅広い。江戸時代には、梅の文様がはいった衣裳は新年から早春にかけてよく目にするものだった。例えば、力強い梅の古木が肩のあたりまで枝を張り、細い若枝がしなやかにのびながら、蕾を交えて花を咲かせ、芳香をただよわせ、裾に春の花である菫とたんぽぽを添え春の風情を思わせる、「風神雷神図屏風」で有名な江戸時代後期を代表する創始的絵師である酒井抱一が絹の着物の上に描いたとされる『白地梅樹模様描絵小袖』などがあげられる。文様を描きながら春の風情を思いださせるものが多く、現在よりもさらに季節感を大切にしてきたことが感じられる。現代の留袖や普段着には、日本画風の梅の老樹を染めたものが多い。

文様の世界観は創り出す作者の自由である。そのため、どっしりと安定した姿の老樹は若苔さえつけて、自由に張り巡らされた枝には、白梅と紅梅を同時に咲かせる実際にはあり得ない図柄も創り出せる。あり得ない図柄が存在しえることで、「雪輪に菊、牡丹、梅、藤などの四季の草花を一緒に咲かせた図柄」のような、「四季を通して着られる」とい



【光琳梅—こうりんうめ・こうりんばい】

尾形光琳が創始した描法で描いた意匠性の強い梅の文様である。やや平らになった、丸い5弁の花の輪郭の中央に、上弦の月のような細い弓形を配して蕊を表現している。

【梅鉢（光琳梅鉢）—うめばち】

梅鉢は、五枚の花弁が離れた円形で表されており、花芯を大きくして太鼓の撥（ばち）のように見せた文様。また、天神信仰の家紋「星梅鉢」や前田利家の家紋「加賀梅鉢」としても有名である。

【ねじ梅（捻じ梅）—ねじうめ】

五つの梅の花弁のつなぎ方をひとひねりしたもので、芯を中心にねじったように重ね合わせた文様。ねじ梅の輪郭を大きく散らし、その花弁の中に細かな吉祥文様を詰めて、華やかさを出す表現方法も多い。

【槍梅—やりうめ】

梅の新枝が天に向かって雄々しく伸びる様子を槍に見立てた文様。梅の花と共に蕾も表現されている。実際の梅に見られる幹や枝ぶりの折れ曲がる様ではなく、まっすぐに槍のよう伸びた枝が表現されている。

【枝梅—えだうめ】

1本の梅を描いたところが特徴であり、古い紋にはない。だて紋と呼ばれる「しゃれ着用」の女紋である。現在では縫紋が遊び紋となっているが、江戸後期には手描き友禅染で染めることもあった。

う便利さだけでなく、四季折々の美の集合体である理想郷が表現されているものや、「チューリップ等の洋花と、牡丹や梅、桜、花菖蒲などの日本古来の花が同居している図柄」のような、日本と海外の花が一枚の着物と一緒に描かれているものなど、今日では自由な発想で図柄が創り出されている。因みに、洋花は明治時代の末から大正時代にかけて着物や帯の柄に取り入れられ、モダンな柄として人気を博した。今日では大正ロマンを表現する着物紋様としてよく見かける。

また、梅は意匠化された文様も多く見られる。梅の花枝を丸くデザインした花丸文の一種で枝を巧みに使い円を表現する「梅の丸」、春霞に梅を覗かせ春を心待ちにする心情を託せる「霞に梅」、八重咲きの梅を意匠化し、蕾と共に寄せ集める「梅寄せ」等があげられる。

紋章としては、「単梅・八重梅」を基に様々な形態が作られる。即ち上下に菱形に向かい合わせた「菱梅」、梅の折枝を図様化した「梅枝丸」、梅花を裏がえしにした「裏梅」、「梅鶴」、「梅蝶」、「雁金梅」等の擬体や合成、六弁花の「軒端梅」「簾梅」等、特殊な形のものなど多彩である。なお紋章の場合、普通は図柄を白抜きとするが、逆に輪郭を白抜きにしたものもあり、これを陰という。梅紋にもこの陰梅の例が少なくない。

### 3-2 梅と取り合わせるもの

梅と取り合わせるものとして「鶯」をあげたいと思う。

梅は鶯を連想させるものである。花札にも、二月を表す梅を描いた一〇点札に「梅に鶯」というものがあるほど、梅と鶯はセットと考えられることが多い。

日本の文学史上に梅と鶯が登場するのは孝謙女帝の天平勝宝三年（751）に編纂された漢詩集『懷風藻』等があげられる。それは、詩集の一〇番目に置かれている葛野王（669〜705）の五言詩「春日、鶯梅を翫す」である。

五言 春日翫鶯梅 一首

春日鶯梅を翫ぶ

聊乘休景 入苑望青陽

いささか休暇の景に乗じて 苑に入つて青陽を望む

素梅開素鬢 嬌鶯弄愁声 素梅 素鬢を開き 嬌鶯を弄す  
对此開懷抱 優足暢愁情 これに対して懷抱を開く 優に愁情を暢ぶるにたる

不知老將至 但事酌春觴

老のまさに至らんとするを知らずに ただ春觴を酌むを事とす

（現代語訳） ちよっと休暇の日をかりて 園に入つて春の景色を眺めた白梅は白く咲きほころび 鶯はあでやかに囀っているうらかな景に心もほどけ 愁いもいつか消えていく 老いのことなどすっかり忘れ 盃を手には春の興にひたるばかりだ<sup>12)</sup>

作者の葛野王は大友皇子と十市皇女との間に生まれた長子で、天智天皇（在位662〜671）と天武天皇（在位673〜686）の孫であり、持統朝における最高の教養人であった。

斎藤昭二著の『花の思想史』<sup>13)</sup>には、第一句「乘休景」という表現は、初唐の盧照隣の「山林日田家」という詩の一節である「帰休假日乗」を下敷きに、第三句・第四句である「素梅開素鬢 嬌鶯弄愁声」という表現も、陳の江総の「梅花落」の一節である「梅花秘処藏嬌鶯」を下敷きにしたものであると記してある。そこから推測すると、梅と鶯の関係と美的感覚は日本独自のものではなく唐風をお手本に作り上げられた美的感覚なのだろう。『万葉集』にも梅と鶯をセットとして見ていたこの時代の文化教養人の美的感覚が表現されている。

### 『万葉集』<sup>14)</sup>

一八二〇 春の花咲ける岡辺に 家居れば乏（とも）しくもあらず  
うぐひすの声

（現代語訳）梅の花が咲いている岡辺に家を設けて暮らしていると、物足りなく思うこともない、鶯の声は。）

一八四〇 梅が枝に鳴きて移るふうぐひすの 羽白たへに沫雪ぞ降る

（現代語訳）梅の枝に鳴いては飛び移り行く鶯の、羽も白くなるほ

どに沫雪が降る。)

一八七三 いつしかこの夜の明けむうぐひすの木伝ひ散らす梅の花見む

(現代語訳―いつになったらこの夜は明けるのであろうか。鶯が木を伝わって散らす梅の花を見よう。)

このように梅と鶯を題材にした和歌に見られる表現は、色彩豊かで梅の枝の色と花の色との調和や、雪の白さを絡ませた趣向のものが多く。春を告げる梅の花と、春告鳥の鶯との組み合わせは、花の美しさと鳴声の美しさがあいまって、更なる美しさを創り出しているのだ。また、鶯の羽ばたきと共にひらひらと散りゆく花びらの舞い落ちる美しさも風流のひとつであったといえよう。これらすべてを満喫させる美的感覚が後に日本独自のものとして確立され、受け継がれていったのである。現在ではすっかり日本人の美意識になってしまったものと考ええる。

梅と鶯のセットは着物でもよく見かけることが多い。梅の文様を図柄としている着物に、鶯を思わせる灰色がかった緑褐色である鶯色の帯を締めるとか、一枚の着物に鶯が梅の花と共に描かれているものなど種類は様々である。春の訪れを思わず着物としてはびったりである。

#### 第4章 梅と「品格」

梅は昔から品格のある凛々しい花であるとされている。桜のようにすぐに散ることもなく、厳しい寒さの中に咲き行く姿は、貴族たちを筆頭に親しまれてきた。また「松竹梅」「四君子」としても有名で、梅が品のある花としてあげられている理由のひとつだろう。梅・竹・蘭・菊を表す四君子は蘭が入ることにより、どちらかという中国文化的な感じを帯びたものに対し、松・竹・梅を表す松竹梅はいかにも日本らしい。

松竹梅文様は、吉祥文様として代表的なものである。よく正月の飾り付けとしても用いられる松竹梅は、人々の祈りが込められた。吉祥文様は、幸福への祈りと喜びを表現した文様であり、松竹梅はその最も代表的な文様としてあげられる。松・竹・梅、共に冬の寒さに耐えることから、古来より中国では「歳寒三友」と称し、また松と竹は緑を保ち色を

変えないことから、節操と清廉を象徴するものとされていた。

『「きもの」と文様―日本の形と色』で長崎巖氏は、奈良時代以降の中国文学の影響もあって、平安時代以降わが国の工芸意匠に松竹梅が用いられることも少なくはないが、当時はこれらの植物のうちのひとつあるいは二つを意匠化することはあっても、それぞれのモチーフが表すものはあくまでも「歳寒三友」としての本義であつたと思われる<sup>15)</sup>と記している。

松・竹・梅とそれぞれ平安時代から見られるが、この三つが組み合わせられ、吉祥文様の代表的な存在として日常生活に溶け込んでいくのは意外にも遅く、室町時代からという。松竹梅文様は、衣裳は言うに及ばず、陶磁器・漆器・家具・建築物にと様々な場面で見られ、婚礼衣装や嫁入り布団、礼服に染織されることも多い。

松竹梅に鶴亀を合わせた松竹梅鶴亀文様も有名で、染織品には盛んに用いられてきた。この文様は「蓬萊文様」とも呼ばれ、中国の伝説に三神山というものがあり、その中の蓬萊山は不老不死の仙人が住む理想郷という。これを日本的に解釈し意匠化したものである。日本ではこの文様の意匠化に関して、想像上の植物や動物を現実的な松竹梅や鶴亀に置き換えることにより、文様自体を和様化している。平安時代以降は文化全般で和様化が進み、空想上の動物や植物は、日本人の馴染みやすい動物や植物に置き換えられていった。蓬萊文様もこの現象が影響されていることが見られる。

文様としては、波に浮かぶ鳥として表現される松竹梅の生えた嶮崖を亀が背負い、鶴が舞うという意匠などが見られる。また婚礼祝いの飾り物の鳴台にその文様の名残を残している。

#### 第5章 日本人と梅 ―おわりに―

「梅」は古くから多くの日本人に愛されてきた。歌の題材としても『万葉集』を始め多くの和歌集で詠まれ、多くの文化人に好まれてきた。厳しい寒さが残る中、馥郁たる香りと気高く咲く梅の花は、常に身の周りの自然に目を向け、季節の移り変わりを敏感に感じ取っていた人々から

すれば、とても魅力的に見えたのだろう。

日本の伝統色としても紅梅色は、「今様色」（＝流行の色）としてもてはやされた時代もあった。また、平安時代の「かさね」の文化には、紅梅色を基調にしたものも多く存在している。梅の色が重なり合い完成されるグラデーションには当時の美的感覚を感じさせる。

文様としても、花卉だけの文様や梅の木全体を文様としているものなど様々である。表現方法の自由から梅の文様が入ったオリジナリティあふれる着物が生み出され、梅と鶯がセットになった着物などは実に春らしい。また、松竹梅文様は、おめでたい吉祥文様としても知られ、中国風で格調高い「四君子」よりもむしろ身近で、日本らしさを感じる文様だと思う。

日本人は着物に四季折々の草花を閉じ込め、着る時期を決めることによつて季節の変化を鮮明に感じ取り、着物を着ることにより四季と一体化し自然と共に生きる暮らしを楽しんでいたのだろう。

本稿は「梅」を題材に「どこに美意識を感じるのか」「梅と日本人の関わり方」を考えながら「着物」への繋がりについて追及してきたが、今後は他の季節の草花についても考えていきたい。

## 注

- (1) 『文様の四季―和装にみる文化と伝統』（P 27～30 平成9年 木村孝著／茶道之研究社）
- (2) 『「きもの」と文様―日本の形と色』（P 218～220／257～261 平成11年 長崎巖著／講談社）
- (3) 『春色梅児誉美』（昭和27年 中村幸彦校注／岩波書店）
- (4) 『西鶴選集 武家義理物語』（平成6年 太刀川清編／おうふう）
- (5) 以下枕草子の引用は『枕草子 新編日本古典文学全集18』（平成9年 松尾聰校注／小学館）の本文による
- (6) 以下古今和歌集の引用は『古今和歌集 新日本古典文学大系5』（平成元年 小島憲之・新井栄蔵校注／岩波書店）の本文による
- (7) 『古事談 下』（昭和56年 小林保治校注／現代思潮社）
- (8) 『続日本後記』（昭和51年 黒板勝美編／吉川弘文館）

(9) 『すぐわかる日本の伝統色』（P 41～46 平成17年 福田邦夫著／東京美術）

(10) 『源氏物語 四 新日本古典文学大系22』（平成8年 柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎校注／岩波書店）

(11) 『日本の文様7 梅』（P 156 昭和62年 相賀徹夫発行／小学館）

(12) 『懐風藻』（平成12年 江口孝夫著／講談社）

(13) 『日本の自然と美（5） 花の思想史』（P 49 昭和52年 斎藤正二著／ぎょうせい）

(14) 『萬葉集（万葉集）二 新日本古典文学大系2』（平成12年 佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之校注／岩波書店）

(15) 『「きもの」と文様―日本の形と色』（P 218 平成11年 長崎巖著／講談社）

※その他の参考文献として、『日本の梅・世界の梅』（平成8年3月30日 堀内昭作著／養賢堂）や『平安の美裳 かさねの色目』（昭和63年 長崎盛輝著／京都書院）等がある。